

# 小さな幼稚園



浜 田 玲 子

自分がその中に入って夢中でやっていると感じていた園も、園児数六、七十名で、年長、年少組の二学級では、最小の園のようである。

最近、地元に公立幼稚園はなく、私立幼稚園にも入園させてもらえない、やむを得ず有資格者に協力を求めて、幼児教室を始めた団地のお母さんの話を度々耳にする。形の上では無認可であるが、幼児教育に対するお母さんたちの執念が生んだ幼稚園である。

記憶も遙か遠く、二十三年前、私がかつて勤めていた新宿区立淀橋第二保育園は、ややこの幼稚園に似た存在と考えればよいかもしれない。

昭和二十九年四月、新宿区淀橋第二小学校の空き教室を保育室に当てられて開園した私の園は、新宿区で最後の十一園目であった。現在では新宿区に区立の幼稚園は三十数園ありその中の十一園は、その前身である区立青空保育園という名称で、戦

後間もなく始められている。食糧事情の良くない頃で、買い出しに出かける母親たちが交代で保育に当たり、紙芝居や歌、遊戯などを青空教室で始めたものが、母親たちの熱意と区の社会教育課の補助によって、次第に小学校の空き教室を利用して運営されるようになったと言われている。

淀橋第二の最後の園が開園の頃は、やや社会情勢も落ちつき、生活もほぼ安定した時代であり、発足当時より区立の幼稚園に近いものにさせようというお母さんたちの強い願望で、開園までの準備は大変だった。

全く何もなかったところからの出発。古い殺風景な空き教室を副園長の教頭先生とペンキ塗りをして、園児用の机や椅子、道具類を入れる引出しを整え、全く初歩的な環境作りがせい一杯の春休み中の作業であった。

区立という名称でも社会教育の一環として運営されていて、区から年額十五万円の補助のほかは母の会費一会員月百円で一

切がまかなわれていたと記憶する。校長兼務の園長、副園長の教頭、それに保育に当たる先生二人の小さな園である。幸いなことに小学校の規模が小さく全校児童数四百名足らずで家族的な雰囲気があつて、高学年児童が保育室の掃除を手伝つてくれたり、用務員のおじさんに園児の登園前から石炭ストーブをあかかたいてもらったり、小学校に依存しているところも多かった。運動会、学芸会、展覧会等学校行事と一緒に参加させてもらうなど、園独自では大変な行事も楽しくできた。

校庭の一部を柵で囲み園庭として充分な遊具も整備できて、児童の遊びとぶつかることがないように配慮された。後日園児とは直接関係のない地元の有志や、小学校PTAにも呼びかけて約百名の有志会を結成、毎月百円ずつの会費を出して頂いていた。その中には参議院議員市川房枝さんもいて、いつも励まして下さったことは忘れられない。

開園一年後にはピアノを購入、やがて園児専用のプールもでき、三年目には古材利用ではあったが独立した園舎を園庭近くの場所に落成するところまで発展していく。現在のように豊かな教材、恵まれた環境の中での保育では考えられないことであるが、折紙、画用紙等の教材、園児のスモック等は問屋街で

求め、安い教材費で豊かな教材という配慮であつたが、これも園児数六十名位だからこそできたことと思う。

古いアルバムを広げていくと、象・熊・兎などの十数個の縫いぐるみ動物に囲まれた御機嫌な子どもたち混つて、二十年前の若い私の顔も見える。この動物たちはお母さん方の手作りの物だつた。型紙を作つて、ミシンをかけ、中にパンヤを詰める。汗とパンヤの屑とでもみくしやになりながらの楽しい作業が、昨日のことのように思い出される。子どもが抱ける小さな物もあり、またがつて遊べるほどの大きい動物もある。

現在の京王プラザに隣接しているあたりが学区で、当時は淀橋浄水場が大部分を占めるため、家庭数は少ないけれど、新宿西口商店街を含めた地域社会の特色もあつて、身体を動かして協力をおしまないお母さんたちの力は偉大なものであつた。温かな気持ちで未熟な私に協力してくれたことは、よりよい保育への原動力となつて、やがては区立の幼稚園へ移管するための基礎となつたのではないかと思う。

五年間の短い在職期間ではあつたけれど、お母さんたち幾人かは毎年お会いする機会があつて、何もないところから出発した二十年前のことを懐かしく語り合っている。